

非言語コミュニケーションで接した選手たち 安永三郎（昭和56年度卒）

昭和57年四月米子市に勤務を命じられ赴任してきた天才ダイバー（いや天災、あついや努力のダイバー）とは私のことである。当時私は選手としての力量をかわれ鳥取県に体育専任講師として米子市立東山中学校に勤務することに相成った。60年には「わかとり国体」を控えている。60年1月には急遽、監督を命じられ選手としての幕を早々に下ろしてしまった。このときから監督あるいはコーチと呼ばれるようになったのだと思う。

私は常々、「楽をして勝つ」ことを意識していた。これは私が小学生のときの恩師で綾女知廣先生に楽して勝てとよく言われた。しかし、いまだに楽をして勝ったことは一度もない。あつたとすれば宮本基一郎選手の最後の試合であったと思う。平成18年「兵庫国体」での試合である。（207はややオーバー、ここでオーバーしておかないと307は決まらない。宮本選手の回転意識そのものはよいが入水姿勢に入ろうとするときの手の持って行き方に難がありはしないか。選手は肩が硬いほうなので力のバランスがそのときに崩れてしまうという欠点がある。407は水をチェックできていたがそこら辺が問題であったであろう。）思い起こせばこの宮本選手とのマンツーマンの指導は笑いが出てしまうほどおかしく、激しいものであった。「楽をして勝つ」ことほど難しいことはない。

非言語コミュニケーション。つまりボディランゲージ、アイコンタクトなどでコミュニケーションをとるといえるものである。ここまでくれば本物である。まさに宮本選手の指導はこれであった。

話を少し戻そう。わかとり国体の1年前になって少年男子2名が飛び込みを辞めてしまった。途方にくれていた私の前に救世主が現れた。当時米子高校の渡部祐二先生の紹介で藤原浩（現山形県在住）、鷲森淳（現福島県在住）の2名がプールにやってきたのは、前年の奈良国体が終わってからのことであった。自分が指導できても1年ない。国体まで1年ないからだ。でもこの2人にすぎるしかない。この2人を辞めないようにしかもこの一年以内で育てなければならぬ。どうにかこうにかコミュニケーションを互いにとるということによって本当に楽しく、そして厳しく接することができたと思う。その年のオフ、われわれにとってはオフという言葉はなかった。トータルしてみると約90日に及ぶ県外遠征を実施している。板踏み十年といわれていた当時の教えに挑んだ。特に藤原はよく板を押さえ、インターハイでは決勝にまで進出している。（順位を上げている）もっと驚くべきことは前宙返り3回半抱え型を跳んでいたということだ。この年国体は4位になった。長距離トラックの運転手という夢を持った少年は、日本体育大学へと進学していった。

以前、常松友美という選手がいた。初めてプールに来たとき、陸上でのトレーニングを次から次へとこなして行った。その姿に「こいつは天才ではないだろうか。」と思いつつ久々の大魚にうれしくなり、「明日からプール練習するから水着もってこいよ」といって、次の日「先生、泳げません」・・・そのときから浮き輪投げの達人と呼ばれるようになっていった。そんな常松が高校の卒業式に代表で答辞を読んだ。そのなかに今の自分があるのは小学生時代から続けてきた飛び込み競技のおかげだといっていた。選手としてあまり芽らしい

芽は出なかったが声を大にしてそういった彼女を見て頼もしくも思った。私に 0 点の飛び込み演技でも人を感動させることができることを教えてくれた彼女は筑波大学の大学院に進学して「夢の研究」をしているという。夢違いではあるが、われわれの夢は果てしなく続いていくように思う。

昨年（2006 年）12 月、アジア・ドーハ大会が開かれた。選手団の 1 員に宮本幸太郎選手が選ばれた。彼ほど物事を考えない選手はいない。現役選手なのであまり触れたくはないがコミュニケーションを取っているようで実はとっていない。選手とコーチのコミュニケーション不足である。

非言語コミュニケーション。この言葉を美化するわけではないが飛込競技においては究極の指導方法ではないだろうか。その究極さを現実のものとするためにわれわれは細かいことまでいろいろやっている。その姿がまさに今のコーチングになっている。コーチングが悪いというわけではなく、その上のコーチングを目指してわれわれはコーチしていかなければならない。「楽をして勝つために」・・・。

日体大 水泳部（飛び込み）50 周年によせて